

### 3 講演録

## 「本は、こころの架け橋」

児童文学作家

村上 しいこ



報告会、楽しそうでしたね。ねこ！ねこ！ねこ！ねこ！ってやりましたね。私も一人でやりました。誰もいなかったですけどね。楽しかったですね。子供たちは、もっと盛り上がるでしょうね。大人は歌っちゃいけないと思うんですよね。歌ってくれた方がいいですよ。皆さん、歌ってあげてくださいね。

いつもですね、講演会で話をする前にね。どうやって、枕を…と考えるんです。今日は、私、鹿児島は初めてなんですけど、まず、切符を買い忘れましてね。結局、買ったんですが、特急券と乗車券込みをとらないといけなかったのですが、何をどう間違ったのか、特急券だけしか買っておらず、まず改札で止められました。なぜ、と思ったのですが。次に、台風が近づいてきてるでしょ。まさか台風が迎えに来るとは思いませんでした。最後に、ただ、遊びに行くだけなら影響もないんですが、講演の時に忘れていけない時計を忘れてしましまして。大阪に着いてから気が付きまして、伊丹空港で買いました。これで三つそろったんで、もう何もないと思うんですよ。あとはね、ええことしかないと思ってるんですよ。そして、カメラの向こうのみなさん、今日は、来場をしてくださってる方よりもカメラの向こうの皆さんの方がどうやら人数が多いそうで。急遽、オンラインに変わった方とかがいて、この奄美図書館の方々も聞いてくださっているようで。どうもどうも。オンラインだからと言って気は抜かず、いやいや気は抜いて、楽に聞いてもらったらいいかなと思います。

で、三つもあったので、もう良いことしかなかろうと思ひましてね。一応ですね、明日は私は奄美大島に渡る予定でいます。台風が気になるころではありますが、逸れるだろうと。あっちの方に行くんじゃないかなと。とりあえず、明日の朝、決めようかなと思っております。飛行機が飛ばなかったら帰るんですが、帰るにしても、多分、大阪行きの方が危ないだろうなと思っております。なので、奄美にも行けない。家にも帰れないとしたら、私もしかしたら、明日もう一日、鹿児島にいるかもしれません。明日のことは明日じゃないと分からないからね。

だけでも、私は行けるんじゃないかなと思うしております。で、一応、枕を考えるんですよ。先ほどね、紹介してくださったでしょ。今回、こういう紹介でいいですかっていう確認はね、幸い、されなかったんですよ。あれ、困るんですよ。確認してくださいって言われると、ここ間違えてるんですよ。なるべく言いたくないんですよ。私は間違ってもらってる方が私はありがたい。多分ね、紹介してくださる方は、間違ったらいけないと思うんですけど、私にとっては間違えてもらったのが楽。使えるからね、枕で。枕は大事。いかに皆さんが肩の力を抜いて聞いてくださるかかっていうのが大事ですからね。結婚してから創作を始めました。子供は三人おります。おりますが、産んではいない。みんな毛むくじゃら。猫です。子供は確かに三人おります。まあ、時間がどういう感じになるか、一応見ながらしますが、もしかしたら、今日、写真をたくさん持ってきましたので、これ見よがしに、見せるかもしれませんし、見せないかもしれません。

これが、今年出た作品の一覧です。2冊ほど昨年の作品があるのですが、こちらの作品名は『みつばちと少年』と『みんなのためいき図鑑』は昨年の作品です。あとの作品は今のところ今年出ている作品で、年内に3冊くらいかな、日曜日シリーズは年間2冊出ているので、5月11月に出るので11月にもう一冊出ます。これで25巻目ですね。



『みつばちと少年』講談社  
村上しいこ/著 高山裕子/絵



『みんなのためいき図鑑』童心社  
村上しいこ/作 中田いくみ/絵

私ね、鹿児島が初めてなんですけれども、私の講演って聞いたことありますか。いらっしゃいますか。いませんね。まあ新鮮。じゃあ新鮮な気持ちで聞いてくださるわけですね。よかった。それじゃあ、今日、たまたま誘われてとか、この場所でチラシを見てとか、学校でとかチラシを見て、たまたま来たけど、ほんまは、全然、村上しいこの作品なんて知らんのやっという方がいらっしゃいますか。カメラの向こうのみなさん、どうですか。いますね。今日を機会に読んでもらえたらと思います。会場の中にはいらっしゃいますか。今までの経験からね、数名は、手が挙がるんですけどね。ありがとうございます。ゼロは初めてですね。

日曜日シリーズは、もともと10巻の予定で書いたんですよ。15年ぐらい前かな。編集者さんから、「日曜日シリーズっていうものを始めましょう。」という提案があって、その時に10巻分を決めて、出る順番を決めて年間に5月、10月というのを決めて、そこからよーいドンでスタートしたんですね。なので完全にスケジュールが決まっている状態でスタートしました。それ

で、10巻が出ました。5年で10巻が出ました。5年経ったそろそろ8巻目9巻目ぐらいになったときに、編集担当さんに、「どうしますかね、これでもう終わりますか、それとも、もう一巡行きますか。」って話になったら、営業さんの方から、「この日曜日シリーズは、図書館でも学校でも、みんな子供たちが読んでるし、ずっと読まれ続けているので、もう一巡しましょう。」と。もう一巡なので、最初の10巻は副題がついてなくて、2巡目の音楽室から副題がつくようになりました。2巡目がまだ18巻19巻ぐらいのときに、「どうします、これ。もう一巡はさすがにきついんじゃないのか。」ということで、21巻目からは、もう日曜日シリーズっていうのは、ある程度子供たちにもう認知されていて、みんなそれなりに、シリーズとしてしては知ってもらっているから、もう、学校に実際にはない教室でいいんじゃないかと。この日曜日シリーズ、まんねん小学校ならではの教室があってもいいんじゃないかということで、21巻目からは新しい教室がでるようになり、今5巻目が出てます。とりあえず、30巻あります。今度、25巻が11月に出るので、26巻目からは、もう1回、21巻目からの教室が、もう一巡します。なんぼ好きな教室つくってもいいよって言われてもね。26巻目から30巻目の教室はつくれなかった。なので、もう1回、21巻目からの教室が出るので、とりあえず30巻は出るシリーズとなっております。読書活動されてる方、発表があった方々は、もうご存知だと思うんですが、子供たちはちっちゃい細かいことを探すのが好きですよ。大人はストーリーを追うけど、子供って、視野が広いんで、大人以上にすごく本の細かいところとか、絵とか、すごくよく見てるんですよ。前の違う巻で出てきたキャラクターが新しい巻に出てきたりするのを、子供は見つけるんですよ。なかなか大人はちょっと見つけられなかったりするんですけども。そういうのもあって、田中六大さん、ご存じですか。六大さんも細かいことを書くのが好きで、ご自身が遊んでらっしゃるんですよ。なので、細かいところに隠し絵があったりとか、間違いはもちろんないんだけど、細かい隠し絵があったりとかされるんですよ。もう一つ、私がしばらく気が付かなかったんですけど、各教室のタイトルのところに、この教室にある楽器がタイトルにあるんですよ。気付いてました？知らないでしょ。これね、私も実はね、数巻出そろってから聞いたんですよ。今回すごく難しかったですって。「なにが？」って言ったら、「タイトルに何のマークを入れるかに迷いました。」って言われて、初めて気付いたんですよ。ほんまや、こんなところに楽器があるって。私もね、大人になってしまっているの反省しました。そういう細かい遊びが入っているのが日曜日シリーズです。



多分、ご存知だと思うんですが、今日ここには表示がないんですけれども、お休みシリーズという冷蔵庫とかストーブとか、休んでばかりのシリーズですね。この休んでばかりのシリーズがね、よく売れてるんですよ。まだね、私がデビューして間もない頃……、あ、話がいろいろ飛ぶんで、いろいろ付いてきてくださいね。

『冷蔵庫の夏休み』は2006年に出たんですよ。あのシリーズが始まったきっかけは、まだ、私が『かめきちのおまかせ自由研究』を長谷川さんと一緒に仕事をさせてもらって。まだ長谷川さんは今ほど忙しくなかったんですよ。まだ余裕があった。あその後、翌年くらいから忙しくなったので、1年デビューが私の方が遅かったら、長谷川さんには多分受けてもらえなかったんじ

やないかなと思います。長谷川さんと一緒に仕事をさせてもらってから、初めて個展に行かせてもらったことがあって。その時に使っていたすごく綺麗なプールの水の水色があって、この水色を使ってもらえる作品を書きたいと思って。で、そのタイミングで PHP さんから、幼年童話を書いてほしいというご依頼があって。まだデビューして数年だったので、ストックなんて全然ないわけですよ。どうしようかなと考えたときに、デビュー前にうちの冷蔵庫が壊れたんですよ。皆さんもね、夏、気をつけて。冷蔵庫は突然壊れるから。長谷川さんのプールの水色と冷蔵庫が壊れたっていうお話をくっつけたら面白いんじゃないかっていうので、『冷蔵庫の夏休み』を書いたんですね。冷凍庫の夏休みはもともとシリーズになる予定ではなくて、単行本だけ、夏休みだけで終わる予定だったんですけれども、絶対、長谷川さんに書いてもらうっていう意思をもって書いたんですね。絶対、長谷川さんが断ってこないテキストを書こうと。こういう風には書いたら、長谷川さんはきっと受けてくれる。長谷川さんオンリーで書いた原稿が『冷蔵庫の夏休み』です。原稿を書いて、編集さんからオッケーをもらって、長谷川さんのオッケーをもらって出たんですけれども、『冷蔵庫の夏休み』が出たときに、営業さんの方から、「これはよく売れるから、次も出すから書いて。」って言われたのが、ストーブなんですけれども。夏が来て秋が来てというのを書いたんです。後付けでシリーズが始まったんです。日曜日シリーズは、最初からシリーズありきで始まったんですけれど、お休みシリーズに関しては、後からシリーズになって、最初に冷蔵庫だけで終わる予定だったんですが、後付けで始まったシリーズで、夏休みがあって冬休みがあって春休みがあって秋休みがあってっていう順番で。これで四季がそろったんですけれども。営業さんの方から「春夏秋冬だけでは季節が変わったら店頭から撤去されてしまうから、撤去されないものを書いてくれ。」と。それで梅雨休みが入って、ずる休みですね。そして昼休み、ほね休みが出たんですよ。10巻目なんですけど、10巻目のテキストは3年ほど前に送ってあるんですよ。こちらは10巻で終わる予定で今書いていますが、今、休んでます。お休みシリーズですから。だから、こんなところで、さぼってます。

(途中省略)

幼年童話になると、少しずつ自分で本を読むことができたりだとか、もちろん読んでもらったりすることも多いと思うのですが、わがままお休みシリーズも日曜日シリーズも、どちらも幼年童話です。ページ数にすると、随分違うし、文字の大きさも全然違うのですが、どちらも幼年童話に入るんですね。わがままシリーズに関しては、自分で読んでもらえたらいいなと思って、ストーリーは一本なんですけど、日曜日シリーズは今、2本動いてる感じなんです。お休みシリーズは10巻あるんですけれども、ちょっととぼけたケンイチとしっかり者のお兄ちゃんがいるんですけど、ケンイチがどんなにふざけたことをしても、どんなに失敗しても、必ずお父ちゃんお母ちゃんが見守っていて、どんなに何をしても見守ってもらえて、子供たちに大事に守られてるからね、一人じゃないからねという気持ちを伝えたくて、書いた作品であって。仮にいじめっ子がいたとして、いじめっ子に名前がないのは、いじめっ子に名前を付けると、その子と同じ名前の子が実際にいると、傷つくのではなかろうかということで、いじめっ子に名前はあります。日曜日シリーズは登場人物も多いし、話もストーリー2本立てになっているのですが、これは、大人も出てくるのですが、ちょっと少ないですね。いろんな友達と、学校に入ったりとか、幼稚園でもそうですけど、今まで家で守られているところから初めて外の社会に出て行っているいろんなことで会うわけですよ。そこで、自分と合わないだとか、ただ意見が違うであるとか、必ず出てくると思うんですね。自分の意見も言いつつ、相手の意見もちゃん

と聞けるようになって、お互いがちゃんと話し合いができるような、気持ちの心を持って欲しいなというのがあって、言われっぱなしとか、自分の意見を通すだけとかではなくて、世の中にはいろいろな意見を持っている子がいて、それぞれのいいところ、相手を認めて自分のことも認めてもらってっていう人間関係が築けていけたらいいなっていう、何かみんな全てあなたのことが間違ってるんじゃないかって、それぞれいいところがあるからね、お互いにいいところを伸ばし合おうねっていうのが伝わったらいいかなというふうな感じで日曜日シリーズは書いていて。ただ、どの作品にも一貫して私が意識してるのは、大人の意見で子供が動かないように。あくまでも、大人はただそばにいて、見守ったりとか、話をしたりとかするけれど、あくまでも子供たちが自分の考えで、自分の意見を自分たちで話し合って考える力を身につけてほしいと思って、大人の意見振り回されて、大人はこう言ったから、というのは書かないようにしているつもりです。

これは『げたばこ会議』ですね。夜中に、げたばこの靴たちが夜中に会議をするという、パパの靴が臭くて困っていますという会議ですね。臭いというのはですね、生きてる証拠。パパが頑張ってる証。頑張ってるから、匂いもあるし、個性だしという、ちょっとふざけた話ではありますが。これはね、高島那生さんが好きでこの作品を買いましたという方がいらっしゃいます。それでももちろん結構です。高島さんのファンの方、いいですよ。十分ですよ。私のことを知らなくても全然構いません。読んでもらって、村上しいこの作品って面白いじゃんって思ってもらえたら、いいかなと思っています。



『げたばこかいぎ』PHP 研究所  
村上しいこ/作 高島那生/絵

次の『タブレット・チルドレン』っていうのは、YA なんですけど、絵を描いてくれたかわいちひろさんとは、かれこれ10年ぐらい前から知り合いですね。彼女はまだ大学生で、手づくりイベントに出展してるんですよ。名古屋のイベントがあって、かわいちひろさんはその場で買える絵を描いて、ポストカードを物販しながら、ライブで絵を描いていたんですけども、それを見て、何かいい絵を描くなあとと思って、イラストではないいい絵を描くなあと考えていて、「児童文学には興味ない？」って声を掛けたら、「すごくあります。」って言うので、「誰かの作品に誰かの話に絵を描く仕事がしてみたいと思ってます。」って言うので、そういう話をしていたのが、まだ彼女が大学生のときで。「じゃあ、いつか。私、まだこのパターンで作品を作りたいという力がまだなくて、一応名前は出すんだけど、却下されるのよね。」って言いながら。「でも、この期間やっていってるだけの、力をつけて来られたら、また、名前出させてもらうから、その時は断らんといてね。」って言うたら、10年経ちまして。今回、『タブレットチルドレン』っていう本につながったわけです。今、一人1台タブレットをもっている時代じゃないですか。私は、松阪市なんですけど、松阪市の中学校は、わりと、



『タブレット・チルドレン』  
さ・え・ら書房  
村上しいこ/作  
かわいちひろ/絵・漫画

世間が一人1台となるちょっと前から、一人1台のタブレットの授業を始めていて、それで、それを使った作品を書こう思っていて。子供たちになじみがある、私達にとって若干の敵ではあるゲームですね。敵というかライバルですね。『タブレットチルドレン』っていうのを書こうと思って。これを、読まれた方、いらっしゃいますか。いらっしゃらないですね。今日、外で物販しているので、よかったです。今日、講演が終わってから、私、サインさせていただきますので。今日帰らないからね。図書館が許す限り、無制限で。一人1冊とは言わないので。この真ん中にある、この子は、毒舌を吐くタブレットの中の子供ではあるんですね。毒舌を吐くゲームの中のキャラクターなんですけど、毒舌だけに嘘がないというか、人間が、主人公のナミが心の中に思っているなかなか言葉に出せないことを、この主人公のナミがずばずばと言って、自分のことを見つめ直すであるとか、自分がお母さんに言っている言葉であるとか、本当はもっともっとお母さんから愛されたいのに、うまく愛情表現が伝わらない。で、クラスで2人で男女2人で、タブレットの中で子育てをしていく。そういう中で、愛情をやるとか、誰かのことを考えるとかっていうのを考えながら、命であるとか愛情だとかっていうのを、作品の中で描いています。ゲームの中で、2人の間にどんなキャラクターができるのかっていうのはこれは選ぶことができなくて、AIが決めるんですね。その中で、育児放棄をしてしまうクラスメイトの別のカップルの子供が構ってあげないばかりに死んでしまうとか、一度死んでしまった子はゲームの中であっても生き返らせることはできない。これは自分の命のことであるとか、愛情を掛けてあげることであるとか、愛情不足であるとか、この作品の中では割と描いています。かわいちひろさんとは、こんな感じで10年越しに作品を作ることができたので、今回、最後のページに4コマ漫画をかいてもらったりして、作品をつくらせてもらいました。これがね、なかなか良い評判で。わりと売れておりますので、読んで損はないです。おすすめです。

今日、鹿児島に講演会をさせてもらうことになったのは、こちらのフルーツふれんずの作品を書かせてもらっているあかね書房さんからご依頼があったんですよ。これは幼年童話なんですけど、これがイガグリくん、イチゴちゃん、スイカちゃん、ブドウくん、今、4巻目の絵を描いてもらっています。1巻目はスイカちゃんだったんですけど、スイカちゃんは自分の顔が大きなことがコンプレックスで、顔が小さいイチゴちゃんにあこがれたりするんですよ。お母さんが使っているフェイスコロコロを使ったら、イチゴちゃんみたいに顔がちっちゃくなるんじゃないかという事でコロコロするんですよ。ただ皮がむけちゃって大変なことになって。顔が大きいとか小さいとか、背が大きいとか小さいとか、それは個性であって、コンプレックスに思うことでは全然ないし、みんなそれぞれ姿や形が違って、それぞれいいところがあるんだから、あなたもいいところがあるんだよっていうのを、小学生は小学生なりにすっごく一生懸命悩んでいる。大人にとって、そんなことと思うようなことでも、子供たちにとってはすっごく重大なことであるわけですよ。それを、フルーツふれんずの子供たちが真剣に悩んで、自分たちで解決していくという話です。私も昔、小さいことがすっごくいやだったんです。内田麟太郎さんってご存じですか。麟太郎さんとね、時々話をするんですけど。麟太郎さんも子供の時、いろいろあっ



『フルーツふれんず イガグリくん』  
あかね書房  
村上しいこ/作 角 裕美/絵

た方ですけど、麟太郎さんが「しいこさん、しいこさん。僕たちも、ちゃんとした普通の家庭で育っていたら、二人ともあと10cmは大きかったよね。」って。子供の時は、本当に小さいことが嫌で、あと数cm身長があったらと思ったんですが、そこそこええ年です。身長なんかどうでもよくなって、なんなら頭ぶつけないからラッキーって。冷蔵庫なんか、上の方なんかはなかなか見えないけど、下からのぞいた方がよく見える。私、食事の支度はしていないので。うちは夫が食事を全部やってくれるので。いつもおいしく頂いてます。掃除とか洗濯だけでね。買い物とかね。夫が全部してくれているので、背が足りなくても全然問題ない。



これが一番新しい新刊ですね。6月に出た新刊です。4巻目です。これは元々、ずいぶん前に出た『ねこ探』という作品があったのですが、これに出ていた「みけねえちゃん」を主人公にして、人間社会の子供たちの悩みであるとかっていうのをうまく解決できるような子供たちのためになるような、言葉をかけられてあげられて、人間社会で書くとちょっと重くなりがちなテーマを、猫の目を通して描くことができないかっていうようなお話をいただいて、今回この「みけねえちゃん」というシリーズがスタートしました。1巻目がシングルマザーのお母さんの大変なことであることがテーマで書いています。この家の10円とこの家の10円の価値の違いであるとか、遠足に持っていくおやつの量とか、そういう子供たちならではの悩みであるとか、シングルマザーのお母さんが持っている悩みであるとか、思いであるとかいうのを「みけねえちゃん」の目を通して、主人公であるとかお母さんであるとかっていうのを、「みけねえちゃん」の目を通して悩みを聞いたりとか、話を進めていって、良い方向になるようになれば。救いになるような作品になればいいなというふうにしたのが『みけねえちゃんにいうてみな』です。1巻目がシングルマザーで、2巻目が……副題は忘れまして。でも何かそういうテーマ、お家のことを書いたテーマです。3巻目が『みけねえちゃんにいうてみな、友達秘密』って言うテーマですが、3巻目はちょっと人間社会で捉えると重たいテーマなんですけど、3巻目に関しては、「みけねえちゃん」の恋模様を描いたんです。過去に何があったんやという、3巻目は友達秘密というのを書いた作品です。若干、猫好き要素が多めに注入されています。猫はおもちゃではない。家族であって、人間のおもちゃではないというメッセージを込めました。お母さんが友達の子供さんを預かってお兄ちゃんっていうのはどういうものかなっていう我慢することばかりがお兄ちゃんじゃないよっていうのを書いたのが『みけねえちゃんにいうてみな』です。

この『みつばちと少年』という作品は北海道を舞台に書いています。うちの近所にハチミツ屋さんがあるのですが、ハチミツを仕入れて売っているのではなくて、家族で蜂を育てていて、4月には、蜂を桜に放してこれを収集して、ゴールデンウィークまでは三重の松阪にいて、こちらの花が終わると、蜂を連れて秋田に行くんですよ。御家族で。家族と言っても若奥様と大おばあちゃんはお留守番なんですけど、若旦那さんと大旦那さんと若奥さんと三人でね、蜂をトラックに積んで木箱にいっぱい積んで、蜂と共に北上していくお家があって。その話を聞いているときに、なんか面白いなど。蜂ごと、青森行って秋田行って最終的に北海道に行くんですよ。雪のシーズンになると帰ってくるんですよ。それはおもしろいな、いつか作品にしたいなと思っていて。何回かお店に通って、「あやしいもんでございませぬ。」って言いながら。「児童文学の作家をしております、何かそういう命の話を聞かせてもらいたいと思っているのですが。」



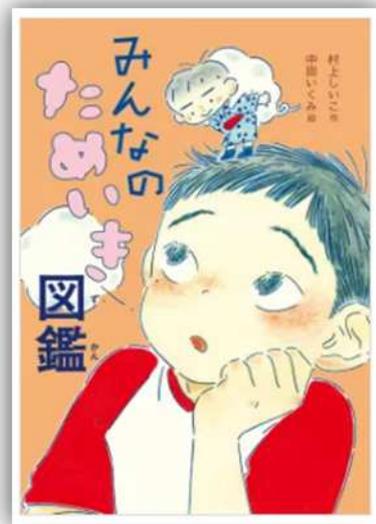
『みつばちと少年』講談社  
村上しいこ/著 高山裕子/絵

て言いながら。何回も何回も通って、あやしいものじゃないやオーラを何度も出して。突然話を聞かせてくれと言うと、同業者とかね。そうじゃないんやってことを何回か通って話をさせてもらって。この作品が生まれたのは、その前に違う企画を提出していたのですが、会議でボツになって、編集者さんと私の間に重苦しい雰囲気が出ていたんですが、次どうしましょうかという話になったときに、この作品に関しては、もう何年かハチミツ屋さんに通って、話を詰めてから書こうと思っていたのですが、いかんせんボツになったから、次を考えなくてはいけない。だから、「実はうちの近所にこういうところがあって。」って言う話をすると、「しいこさん、北海道ですよ。僕にはもう見えました!」。そういう状態で始まったんですよ。そこから急いで取材を始めて、急いで話を聞いて、急いで書いて。それで、これが、普通って何だろうということをテーマにしています。あたしも普通、あなたも普通、この子にとっても普通。それぞれに普通ってあって、でも普通って何。その子のもっている今が普通なのではないのっていう。私の普通をこの人にはめてはいけない。この子の普通は個性なんだっていう。この主人公の男の子はちょっと発達障害気味で思ったことを口に出してしまう、ちょっともめ事が勃発してしまったりとか、悪気はないんだけど、すぐ言葉に出してしまったりとかで、僕がしゃべると、なんか喧嘩になってしまうとか、自分なりに分かってるんだけど、でも自分でもどうすることもできない。こういうことに悩んでるという子が主人公ではあるのですが。夏休みの間、北海道の親戚のところまでファミリーホームみたいなのところに、この子は一緒に過ごして、いろんな子供たちと触れ合っていく中で、自分のことであるとか人のことであるとかいうのを体感して、交友関係をもちながら、成長していくという、自分の気持ちと向き合いながら自分のことが分かる。「僕、作品読んで、成長しました。」って、編集者自身が自画自賛してました。この作品はYAではあるのですが、あまり児童書感を出したくなくて、坂野公一さんという装丁家の方がいらっしゃるのですが、主に小説を担当されている方で、その方にどうしても装丁をしてほしいとお願いをしたら、初めて児童書の装丁をしましたっていうことで。小説っぽく、児童書っぽくなく、子供から大人まで手にとってもらえるような装丁にしてもらって、私も気に入っている装丁であります。絵を描いてくださった高山裕子さんには私が送った写真を絵にもらったので、ハチミツ農園の方も、これこれ、うちが送った写真と一緒にやって喜んで

でおいりました。本の中で、イカめしを作るんですけど、イカめしを実際に作って食べました。夫が作って私は食べるだけですけれどね。イカめしを4種類か5種類作って、白米と餅米の割合であるとか、さくらのチップと何とかのチップの割合とかっていうのを夫がいろいろ分量を変えながら。餅米だけだと、当然固くて食べられないし、白米だけだとべちゃっとして食べられないんですよ。冷めてもちゃんともっちりしておいしくなければいけない。そして、イカも燻製によつたら香りがつかないとかって。夫が家でですね。4パターンか5パターンくらいいろいろ作ってくれて、最終的に、これがおいしいっていうのができて、最後そのレシピで、イカめしコンテストに出るって話です。イカめしの話じゃないんですけどね。

こちらが、『みんなのためいき図鑑』で、今年の課題図書に選ばれた本であるのですが、本屋さんに行ったらお気付きの方とかもいらっしやると思うんですけど、今は児童書も貧困、差別、いじめをテーマにした児童書ってすごく多いんですよ。SDGsもそうですけど、前面に押し出した、あっちもこっちもいじめ、貧困、差別ってというのは、すぐ児童書でも多くなってきて。でも、それで読書が好きになりますか。私は、それで子供が本が好きになるかなと思って。それを子供に押しつけてどうすんのかと思って。そういう自分がいて。私がデビューしたばかりの時に、作家の大先輩に、「私も先生みたいなロングセラーになる作品を書きたいです。」って言ったことがあって。そしたら、「売れる作品を書こうと思っちゃいけない。今の子供たちに向き

合った作品を書かなきゃいけない。」って言われて。なるほどと思って。売れようとか売りたいとかじゃないんやと思って。それをデビュー初期の頃に言われたので、それを肝に銘じながら作品を書いているんですけど。この作品を書くときも、改めて本屋さんを見て、貧困も差別もいじめも大人が原因なのに、それを子供に押しつけてはいけない、子供たちに責任をとらせようとするのはおかしいと思って。本来、楽しい、おもしろいということの中から、子供たちが何か感じ取ってくれたら、それでよしであって、帯にバーンと書いて、押しつけるようなものではないなと思って、一度原点に戻ってもう一回、中学年童話をちゃんと書こうと、久しぶりに書いたんですよ。それで、子供たちとリアルに話をしていると、「コロナであちこちに行けない。」って。「大人はあちこちに行けて、私たちだけが犠牲になってる。」って言ったんですよ。そう言った子に私は何も言い返せなかったんですよ。「大人が悪い、大人が感染を広めているんだから、大人が悪い。私たちはずっと我慢してる、遠足だっけ行けない。遊びにも行けない、友達にも会えない。ずっと家の中。でも大人は外に出てる。」。確かに。あなたの言うとおり。それで、そういういろんな子供たちのいろんなため息。「お母さんは、僕たちが友達を叩くと怒るのに、どうして僕を叩くの、それは許されるの。」って。そういう子供たちの小さなため息、重要なため息を聞いていて、救ってあげられたらいいなと思って、ため息小僧というため息を擬人化させたキャラクターを作って書いたのが『みんなのためいき図鑑』です。みんながため息をつく時って、嫌なことがあったときだけではないと思うんです。おいしいものを食べたときとか、めっちゃ男前やとかめっちゃきれいな人とか、きれいな景色を見たときとか



『みんなのためいき図鑑』 童心社  
村上しいこ/作 中田いくみ/絵

は、ハーっとなるでしょ。昨日は桜島を見せてもらったんですよ。すごく素敵でした。そういう時もため息って出ると思うんです。そういうため息を擬人化して、クラスで発表してという話です。



これは、9月、10月に出る新刊の表紙です。ちょっと、これはまだ修正前なので、ちょっと絵が変わるんですけど、ちょっと女の子の表情がちょっと変わりますが、全体的なデザインが右になるか左になるか分かりませんが、『ピースがうちにやってきた』という話が9月か10月に出ます。これは、どちらかが表紙になるんですが、直してもらった絵がこれかな。お気付きの方もいらっしゃると思いますが、ピースというのはうちの息子です。これは、うちのピースを保護したときに、「毎日新聞の連載で書いていた作品を本にしましょう。」と言ってくださって、今回加筆修正をして、本になります。

(途中省略)

話があちこちしてしまいましたが、今、私は作家としてこうして幸せだと思えるようになり、こうして作品を書かせてもらい、こうして鹿児島まで来させていただくこともできました。いろいろな方との出会いとか、その方との触れ合いとかを話をさせていただきました。ここで話を閉めさせていただきたいと思います。あとは、明日、奄美に行けたらいいなと思っております。ありがとうございました。